最初の狂言独訳について

渡　辺　徳　夫

市河三喜氏によれば，「狂言の鷗州語譯は 1880 年代に，謡曲のそれと殆ど時を同じうして始められた」[1] という。『能楽全書』の翻訳目録を見ると，1879 年にバジル・ホール・チェンバレンが『骨皮』の英訳を雑誌 Transactions of the Asiatic Society of Japan に掲載しており，これが英語，つまり欧州語に全訳された最初の狂言の曲であると思われる[2]。そして，狂言の曲が初めてドイツ語に訳されたのは，『狂言辞典』に従えば，1884 年 4 月に Das Magazin für die Literatur des In-und Auslandes 誌上に掲載され，ユンカー・フォン・ランゲッグによって訳された『六人僧』ということになる。その 2 か月後の 6 月に同雑誌に同氏によって『墨塗（すみぬり）』の独訳が掲載されている[3]。

本稿では，1884 年（明治 17 年）にユンカー・フォン・ランゲッグによって独訳されたこの『六人僧』（『墨塗』については稿を改めて扱う）を取り上げ，翻訳の典拠と翻訳上の特徴について述べることにする。外国人による能楽に関する先行研究において，私が調べた限り，明治期におけるドイツ語による狂言の翻訳に関する詳しい考察を見出せないので[4]，本論がそのテーマへの初めてのアプローチということになると思う。

1

まず，この狂言『六人僧』『墨塗』の二曲を独訳したユンカー・フォン・ランゲッグの略歴について述べてみよう。B.H. チェンバレンやカール・フローレンツは能，狂言の曲を翻訳しており，明治期の言語学者，日本学者として一般に知られているが，ランゲッグの専門は何か。『新潮日本人名辞典』が「ユンケル」の項目の箇所で，彼の経歴を要領よくまとめている。

ユンケル　Ferdinand Adalbert（Edelbert）Junker von Langegg 1828―？明治期に来日したドイツ人（のちに英国に帰化）医学教師。ウィーン生まれ。ウィーン大卒。明治五年（1872 年）来日し創設直後の京都府療病院に赴任。診療と教育にあたり，解剖学のほか外科学，内科学，精神医学を講じた。しかし周囲との協調性に欠け，九年更迭。麻酔を得意とし，小型携帯麻酔器を発明した。九年帰国[5)]。

ランゲッグ（ユンケル）は，京都府立医科大学の前身，京都府療病院の初代外国人医師として招聘された。今から丁度 150 年前，明治 5 年，1872 年のことである。近代日本の医学に多大な功績を残した内科医ベルツや外科医スクリバよりも数年早く医学分野のお雇い外国人として来日している。ただ，日本の資料では，彼の没年不明の記述がいくつか見られ，上記の人物事典の括弧内のように Edelbert の名前もあり，彼の略歴にははっきりしない部分があるが，麻酔器の開発史に関するドイツ語の医学論文に当たってみたところ，ランゲッグの医学者としてのプロフィールが紹介されており，それを見ると，それらがある程度はっきりしてくる。

フェルディナント・アーダルベルト・ユンカー・フォン・ランゲッグ。英語で F.Ethelbert J. あるいは，F.Edelbert J. とも表記。1828 年 7 月 7 日，ウィーン生まれ。1854 年ウィーン大学部医学部を優秀な成績を収め修了。その後ロンドンに移り，1860 年に「イングランド王立外科医師会」の会員になり，「サマリア人無料診療病院」の医師となる。1870 年ドイツに戻って，普仏戦争に従軍。ザールブリュッケン大学外科部長を歴任。1873 年日本に渡り，京都の新設病院並びに医学校の主任教授兼診療部長を務める。4 年の勤務の後，帰国。1901 年に死亡したと思われるが，詳細な資料，データはない[6)]。

野上記念法政大学能楽研究所による『外国人の能楽研究』の能楽関係外国語文献目録における〈ドイツ語〉の箇所には，この『六人僧』『墨塗』の翻訳の記載はなく[7)]，能楽研究において一般に流布している『能・狂言事典』の関連人物や参考図書目録の項目にもユンカー・フォン・ランゲッグの名前や彼の翻訳は取り上げられていない[8)]。彼の名前や略歴，翻訳の

業績がそれらの能楽研究書から漏れているのは，おそらく日本での彼の主な活動が医学者だったことが，その理由の一つに挙げられるであろう。

しかし，彼の離日後の足取りについて調べてみると，医師の奥沢康正氏がランゲッグの著書 Fu-sô châ-wa. Japanische Thee-geschichten.Volks- und geschichtliche Sagen, Legenden und Märchen der Japanen を『外国人のみたお伽ばなし—京のお雇い医師ヨンケルの『扶桑茶話』—』と題して翻訳しており，巻末の解説のところに次のように記述している。「日本を去って後，ヨーロッパに戻ったヨンケルは，イギリスに住んだと考えられる。1882 年から 1901 年までは，ロンドンを本拠として医師として生活したとされる。（中略）この間に多くの著作，論文発表などが行われているが，分けても，ライプチヒで 1880 年に出版された『瑞穂草』，ウィーンで 1884 年に出版された『扶桑茶話』の二著作は，ジャパノロジストとしての評価を高めた。」[9)]

ただ，奥野氏による，巻末に記載されたジャパノロジーの資料には Alte japanische Dramen.in:Das Magazin für die Literatur des In- und Auslandes. の雑誌名だけが掲載されていて，狂言翻訳の業績は挙げられていない[10)]。

しかしながら，本稿で取り上げる狂言『六人僧』『墨塗』の独訳が，上記のドイツの文芸雑誌に掲載されたのが 1884 年であり，そして，それぞれの翻訳の最後に「ロンドン」と記されている[11)]ことから，これらの狂言の翻訳もまた『瑞穂草』『扶桑茶話』と同じく，離日後のジャパノロジストとしての活動の一つであると見なしてよいと思う。

2

さて，上述で見てきた通り，この翻訳者は「ユンケル」や「ヨンケル」とも表記されるが，本稿では「ランゲッグ」と記すことにする。

では，ランゲッグがこの『六人僧』『墨塗』をドイツ語へ移した際，どのテキストを典拠にして翻訳したのだろうか。市河三喜氏は，「今日までに現れた狂言の鷗州語譯は何を原本にしたのかの問題に就いて一言したい。筆者の見たる限りに於いては從来の譯は悉く「狂言記」に據つたもののやうである」[12)] とやや断定的に言っているので，まず，二つの独訳が，江戸時代に出版された，その『狂言記』という台本を原本にしたのかどうかについて言及する。

『狂言記』とは『能楽大事典』によると「江戸時代に版本として市販された狂言台本。江戸時代から明治・大正期まで狂言の内容を知るのに読まれたほとんど唯一の台本」[13] である。本稿で参照する岩波書店の新日本古典文学大系の『狂言記』は,「京都大学文学部蔵『万治三年版後印本』,『狂言記外五十番』(元禄十三年度版)」を底本にしている[14]。

まず,『狂言記』と二本の独訳された狂言とを突き合わせてみると，確かに曲の大筋は同じではあるけれども，ト書きや一つ一つの台詞の言葉の量，そして場面転換に違いがあり，ランゲッグがこの『狂言記』の原文をそのまま右から左へ逐語的にドイツ語に移したものではないことは容易に分かる。特に『墨塗』に関しては, 独訳の台詞の言葉数の多さのみならず,『狂言記』では，上京していた大名が帰郷するため，従者の太郎冠者を連れて馴染みの芸者宅へ暇乞いに行くのに対し，独訳の方では，大名が太郎冠者に言いつけ，馴染みの芸者を大名宅に呼び立てて，そこで女に別れ話を切り出す，という筋立てになっていて，登場人物の動きが正反対になっており,『狂言記』と大きな隔たりが見られる。市河氏の「筆者の見たる限りに於いては従来の譯は悉く「狂言記」に據つたもの」という見解は，ランゲッグによるこの「欧州語訳」には該当しないように思える。

では，この狂言の独訳は一体何を原本にしているのだろうか。来日前と来日後において, もっぱら医学者としての経歴を歩んできたランゲッグが, 3,4 年程度（奥沢氏によると，3 年 6 ヶ月）[15] の日本の滞在歴で日本の古典の作品を十分に理解するだけの日本語を習得していたとは考えにくい。

そもそも狂言の曲が 200 番以上もあるうちで，大蔵流にはなく，そして，現在でも上演されることの少ない，しかも，狂言のなかではあまり知られていないこの『六人僧』を，なにゆえランゲッグが選曲したのかという疑問が残る。

実際,『能・狂言事典』の 1987 年の初版では「六人僧」の項目はなく，新版になって新たに「六人僧」の項目が設けられたものの，その解説では「筋の運びは変化に富んでいるが，場面がめまぐるしく変わり求心力に欠ける。」[16] と書かれているところを見れば，確かに，この曲が一般に狂言の代表曲ではなく，傑作でもないように思える。

3

『狂言事典』を調べてみると，1882 年 5 月，7 月，8 月に『六人僧』（The Six Priests），『墨塗女』（Ink-stained），『棒縛』（Pinioned）の三曲の英訳が，次々に The Chrysanthemum 誌上に発表されていることが分かった[17]。

その発行年の 1882 年と言えば，ランゲッグが『六人僧』と『墨塗』の二曲の独訳を発表した年の 2 年前である。『狂言事典（資料編）』を見る限り，1882 年前後に出された『六人僧』の欧文翻訳はない。ということは，ランゲッグは翻訳の際にこの雑誌の英訳を底本にしたと推測できるのではないか。

『狂言辞典』で英訳者は「無署名」となっている通り，英語の原文には訳者の名前は見当たらない。この英訳が誰によって訳されたのか，どの台本に依拠しているか，そして英語の翻訳者がなぜこの三曲を選んだのかその理由についての検証は本稿の目的ではないが，スラボフ氏がこの雑誌について解説しているので，引用しておく。

> 明治期の英語雑誌として，The Chrysanthemum（『菊の花』）があるが，その刊行は 2 年間しか続かなかった。雑誌は日本で刊行され，対象読者は在日本の外国人宣教師や日本の知識人だった。編集者は，カナダメソジスト宣教師チャールズ・エビーだったが，エビーは日本文化を熱心に研究し, 古典文学にも興味があった。1882 年（明治 15 年）『ザ・クリザンテムム』の 5 月, 7 月, 8 月号にはエビーが翻訳した狂言が載っている。ただし，エビーによる紹介は 狂言の英訳にとどまっており，説明などは記載されなかった。英訳された狂言は『六人僧』，『墨塗』，そして『棒縛』の 3 つである。『ザ・クリザンテムム』は 対象読者の数が少なく，また海外で読まれていなかったため，これらの翻訳は広く知られていない[18]。

ところで，スラボフ氏は，上述の『ザ・クリザンテムム』の英語の狂言翻訳について,「狂言の英訳にとどまっており，説明などは記載されなかった」と述べているが，そうではない。この英語翻訳の後註には

> 日本の軽妙な演劇である狂言は 15 世紀頃に端を発する（チェンバレン：

『日本人の古典詩歌』の序文と補遺を参照)。この演劇は中世の人々の日常生活や言葉がどのようなものであったかを今に伝えている（チェンバレン；『狂言における中世口語について』。第 5 巻第 3 部。日本アジア協会出版を参照)。これらの狂言は，より重厚な歌劇の合間に同一の舞台上で演じられた。チェンバレンによれば，この舞台はあらゆる点で 15 世紀初頭のままの形式が維持されている。簡素な木造の正方形の舞台は，その三方が壁のない開放された状態で，柱により支えられ，1 辺が約 18 フィートの正方形になっている。9 フィートの幅の通路が舞台の奥の緑の松が描かれた背景に続き，そこで太鼓などの楽器演奏者が控える。舞台全体を古寺風の屋根が覆っている[19]。

と狂言についての概要と能舞台の構造の説明が書かれている。

英訳の注記ではさらに「中世のヨーロッパにおいて世間に嫌気をさした人たちが世間を断念し，隠遁生活を送り，僧侶や尼僧になったが，それは中世の日本も同じである。（中略）寺に出家を志願すると，寺の僧侶が出家志願者の頭を剃髪し，今後の行動について訓示を与え，時には洗礼に似た儀式を施す程度であった。」というふうに日本の僧についての説明がある[20]。

また，『六人僧』の登場人物達は高野山に巡礼の旅に出るという話であるゆえ，*Kōya,or Kōya-san* について「8 世紀に弘法大師が開き，大阪から 50 マイルほど離れたところに位置する，有名な修禅道場である。（中略）最も厳格な仏教の宗派の一つである真言宗に属し，かつては多くの世間からの隠遁者が訪れた。」[21] との地誌情報も註に入っている。以上のように，後註を付けて，英語の読者用に解説が施されているので，『ザ・クリザンテムム』に掲載されている英語の狂言翻訳は「狂言の英訳にとどまって」はいない。

では，独訳の方はどうか。ランゲッグによって独訳された狂言にも，翻訳の前に次のような前文が置かれている。

日本人の昔の古典劇について。能と謡があるが，一度の公演の間に能の数曲が上演される。それらの能と交互に一幕の短い喜劇もしくは笑劇である狂言が演じられるのが常である。その狂言は能と同様 15 世

紀の後半に端を発する。ハンス・ザックスの文芸を知る当時の中世の人たちが日本の狂言を見れば，いくつかの点で彼の喜劇を想起するであろう。狂言は，散文，つまり庶民の日常の言葉で書かれ，中世の時代の風習や考え方の真の姿を私たちに提示している。(中略)。狂言は，能や謡の，抑揚をつけた叙唱の朗読や悠然とした硬い動きと異なり，明るい題材にふさわしく，写実的で，自然な声と自由な動きを伴い，喜劇的な要素を主眼とした，しばしば生き生きとした滑稽味をもって描写される。狂言は，数百年の時を経てもなお衰えることなくその生命力を保っている。[22)]

ここには英訳におけるような能舞台についての紹介はない。しかし，前年の 1883 年 6 月の Alte japanische Dramen.in:Das Magazin für die Literatur des In- und Auslandes. の「No.22 と 23」の「謡曲『高砂』，祝祭劇を参照せよ」と註が付いている[23)]。その 22 号で掲載された『高砂』の翻訳の前文に，ランゲッグは能舞台について詳しく解説をしている。

そして，独訳にも英訳と同様に，日本の僧についての解説がある。「キリスト教の国々におけるように，日本においても 6 世紀に仏教が入ってきて以来，多くの人たちが世間から遠ざかり，一時的にもしくは永続的に修道院に引きこもっていた。多くの帝，貴族，武士，市民や農民たちなど，階層，性別，世代に関係なく多くの人たちが様々な理由から宗教上の身分に入っていった。とはいえ，誓いによって永遠に自分を束縛する必要はなかった。もちろん実際の僧侶，祭司，坊主はその必要があったが。世間を断念した決意の証として，祭司やすでに剃髪された人から頭を剃って丸坊主にしてもらい，そして僧衣もしくは僧侶の身分を表す目印を身につければ，それで十分であった。」[24)]

また，Kō-ya についても「大阪から南西 80 キロのところに位置する，紀伊の国の，標高 500 メートルの高野山にある有名な日本の巡礼地の一つ。もっぱら寺，僧院，巡礼者の宿坊から成り立っていて，その昔，隠遁者の避難所になっていた。そこは弘法大師，「掟（すなわち，仏教の教義）の偉大なる師」（774 − 835）によって開かれ，彼はまたこの地に埋葬されている。その寺院は，厳しい仏教の宗派，真言宗，「真の言葉の宗派」に属している」[25)] というふうに，英訳の註以上に，地理的かつ歴史的に詳し

い記述が付け加えられている。

このように，英訳には狂言の概要，能舞台，そして日本の僧や高野山などについて説明されており，独訳にも同じくそれらについての言及があり，英訳より詳しい解説がなされている。特に，ハンス・ザックスの名前を挙げるところなど，ランゲッグは日本の狂言という存在をドイツ語圏の詩人や文学者に伝え，何とか理解させようという意図が見られる。

4

まず，本文の比較に入る前に，『六人僧』の内容について紹介しておく。

ある男が近所の二人の仲間を誘って，参詣の旅に出る。道すがら「旅の間は決して腹を立てない」と誓いを立て，三人は仲良く高野山を目指す。男が疲れて辻堂で熟睡すると，他の二人は，いたずら心から男の頭を剃って丸坊主にし，法体にしてしまう。男は，目を覚ましてみると，自分の姿がすっかり変わってしまったことに驚くが，誓いの手前，この二人に面と向かって怒ることができない。この二人は高野山に急ぎ，男は彼らと別れて帰路に就く。

腹に据えかねた男は，帰郷するやいなや，仲間の妻たちを呼び出し，「あなたがたの夫は旅の途中，川で溺れて死んだ」と嘯き，出家して弔うよう勧める。事情を聞いて，二人の妻は泣き崩れ，勧められた通り，出家して夫の跡を弔うと言う。そして，男は彼女たちの髪を剃り落とし，尼にして，「その髪を高野へ納めに行く」と言って，再び高野山に向う。

男は仲間の二人に追いつき，今度は「家へ戻ったら，誰が言ったのかは知らぬが，そなた達が溺死したと言って，妻たちが夫の後を追って自害した」と告げ，その証拠として妻たちの髪を見せる。二人は，それを目にして，泣き崩れ，出家して妻の跡を弔うと言うので，男は，彼らの髪を剃り落とし，出家させる。

三人はひとまず家に帰り，仲間の二人は妻たちの無事を知り，二組の夫婦は互いに喜ぶが，すぐさま事情を知った彼らは，怒って男に詰め寄り，彼の妻の髪を剃り落としてしまう。こうして六人すべてが出家となり，僧になり尼となって修行の旅に出る，というのが『六人僧』の梗概である。

では，ランゲッグは，自らの翻訳の中にこの『ザ・クリザンテムム』に掲載された『六人僧』，『墨塗』の英訳狂言を参照したことを書き記してい

ないけれども，この章で実際に彼がこの英訳に依拠したかどうかを調べてみよう。

『狂言記』の台本を見ると，冒頭にシテによる「罷出たる者は，此当りに住居致す者でござる」という名乗りがあるだけで，登場人物と場面設定の記述は一切ない。しかし，英訳では「三人の商人とその妻たち」「京都の通りで」と人物の職業と場所についての指示が簡潔に書かれている。独訳では「三人の町人, 彼らは京都の同じ長屋に住むお隣同士。その妻たち」「町人 B の家のある京都の通りと大坂へ向かう路上。この二つの場面が交互に変わると想定されたし」と，登場人物の人間関係と筋の展開する場面が英訳よりも具体的に書かれている。独訳の方に京都と大坂間の場面転換の言及があるのは，ランゲッグ自身，京都に住んでいたためであろう。

以下に引用する【英訳】は，1882 年に『ザ・クリザンテムム』誌上に掲載された『六人僧』の英訳狂言の和訳であり，そして，【独訳】は 1884 年に『内外文学雑誌』に掲載された，ランゲッグによる『六人僧』の独訳狂言の和訳である。なお, 英訳と独訳の前に『狂言記』の台詞を挙げておく。

では，冒頭の主役のシテが二人の友人と旅に出て，誓いを立てるところを見てみよう。

【狂言記】

シテ：ケ様に道同致すからは，自然腹の立つことがござる共，互いに堪忍を致いて道同致さふ

アド：仰らるゝ通り，長の旅じや程に，ざれこともせいでも叶はぬことじゃ，いかやうのことが有とも，堪忍を致ひて，道同致さふ

シテ：や，殊の外くたびれてござる，折節これに辻堂がござる，先腰を掛けて，休みませふ，あゝ，いこふ草臥でござる，ちと某はまどろみませふ

【英訳】

A：こうしてみんなで揃って出立したのだから，どんなに気に入らないことがあったとしても，お互いに我慢して，腹を立てないと誓おうではないか。

B：君の言うとおりだ。これから長旅だし，たまに冗談を言われても，怒っちゃいけないことにしよう。何が起ころうと，皆で仲良く一緒に

参ろう。（お堂に近づく）疲れたな。ありがたいことに，ちょうど小さなお堂があるぞ。さあ，腰を下ろして，一休みするか。ああ，本当に疲れた。ちょっと一寝入りするとしよう。（眠り込む）

【独訳】

A：われらはよい道づれだ。そこで一つ決めごとをしよう。お互いに忍耐と寛容の心をもって，どんなことが起こっても，何をされても腹を立てない，そういう取り決めをしようではないか。

B：同感だね。これから長旅だし，たまに悪ふざけをすることもあるだろう。でも。そんなことに怒ってはいけないな。何が起ころうと，皆で仲良く仲間として一緒に旅をしようじゃないか。（三人，舞台の上を回って，お堂に近づく）

A：疲れたな。ああ，ちょうどいい，そこの道端にお堂があるぞ。こっちに来て，腰を下ろして，一休みするか。ああ，疲れてもう動けない，ちょっと一寝入りするとしよう。（眠り込む）

『狂言記』の下線部を見て分かる通り，道中立腹しない，と約束をした主役のシテはくたびれて，お堂を見つけ，一寝入りしようと独り言を言う。その直後，彼は眠り込んで，その間に，参詣仲間，つまり，アドたち（B と C）によって頭を剃られてしまうことになる。

ところが，英訳を見ると，シテの A ではなく，アドである B が「疲れたな」とつぶやき，すぐにぐっすりと眠り込んでしまっている。B はこのあと男の頭を剃る側の人物であるから，ここで熟睡してしまうのはおかしい。寝るのはシテの A でなければならない。これは英訳者の勘違いであろう。「シテは，寝ている間に頭を剃られてしまうが，自ら怒らないと誓いを立てた手前，怒ることができない」というのが，この曲の構成の前提である。ランゲッグは，それを理解している。独訳では，英訳の誤謬が，シテの A の独白へとしっかり軌道修正されている。

あと独訳の方には「三人，舞台の上を回って，お堂に近づく」という「道行」のト書きが補われている。「道行」は狂言の場合，人物たちが台詞を言いながら舞台を一巡して，主筋が動き出すことを示す，狂言の重要な構成要素の一つである。『狂言記』において舞台指示がないところに英訳では「お堂に近づく」というト書きが入れられ，さらに独訳では「道行」という小

段が置かれているということになる。つまり，ランゲッグは，狂言台本の構成と能舞台を念頭に置いて翻訳しているように思える。

このあと，シテは熟睡している間に，他の二人に丸坊主にされ，その悪戯がきっかけで参詣仲間も仲たがいすることになる。アドたちは高野へ旅立ち，髪を剃られたシテはどうにも腹の虫がおさまらず，一人郷里に戻って，彼らに復讐しようと考える。二人の留守宅を訪れ，彼らの妻を呼び出す。呼び出された彼女たちは，シテの男を目にするや唖然とする。

妻たちは，夫と出かけたはずのシテがただ一人だけ，しかも出家姿のいで立ちで戻ってきて，「面目ない」と恥じ入る様子を見て，「これはいかなこと，それは何としたなりでござるぞ」と驚く。シテは「涙にむせんで言われぬ」と言い渋り，妻たちは「早ふ仰られい」と詰め寄る。そこで，シテは「それならば，隠いてもいらぬこと，言はふ」と悲しい表情を見せつつ，彼女たちに次のように語るのである。

【狂言記】

シテ：…道に大きな川があった，二人は「渡らふ」と言ふ，某は「深そふな程に先様子を見て渡らしませ」と言ふたれど，聞かいで，手と手と取り合ふて渡つた程に，まん中で，深い所へはまつて，二人ながら，棒やなどを振るごとくに，ぶらりぶらりと流れて，死んだ

【英訳】

A：…大きな川にたどり着きました。二人が「歩いて渡ろう」と言うので，わたしは「深そうなので，渡る前に先ずよく確認した方がいい」と言ったのです。でも，二人はそれを聞かずに，手に手を取って渡り始めたのです。すると，川の真ん中で深みに足を滑らせて，二本の棒きれのようにあっという間に流され，亡くなってしまったのです。

と英訳の台詞は『狂言記』とほぼ同じである。ところが，独訳は以下のようになっている。英訳と最も異なる部分なので，省略せずにほぼ全訳を掲げる。

【独訳】

A：…一緒に仲良く歩いていると，一本の川が流れているところに出

てきたのです。あなた方の亭主は「どうだ，渡ってみるか」と言ったので，「いや，危険だからやめよう。雨が降った後だから，きっと水嵩が増しているはずだ」とわたしは申しました。先週はひっきりなしに雨が降っていましたでしょう。あの時，この先二週間ぐらい降り続けるんじゃないかなと言ったけど，でも，あんたらの亭主が言うには，いや，悪い天気はそう長くは続かないと。実際，その通りになって，こんなにすっかり晴れ上がり，旅行日和となった。暑さも和らぎ，土埃も立たない，これほど気持ちよく，楽しい旅は，生まれてこの方初めてで，まさかこんな素晴らしい日に恵まれるとは，思いもしなかったんだが。話を戻すと,「川を渡ろう」というご亭主たちの言葉に対し，わたしは「見るところ，先週雨が降っただけに，今は，川の水がかなり深くて，流れもずいぶん急で危ないから，渡し船を見つけるのがいい」と申しました。でも，だめだった，二人は，わたしの言うことなどまるで耳を貸さず，川を渡ろうとしたので,「やめろ」と強く言ったものだから，口喧嘩になりそうになった。ああ，親友同士が交わした最後の言葉が，言い争いみたいなことになってしまって，それを思うとね，つかみ合いの大喧嘩にならなかったのが，せめてもの慰めだ。結局，あの二人は川を渡ろうとして，わたしは渡らず，その場にとどまり，その行方を見ていた。説き伏せようとしても，それができないのがあなた方のご亭主だ，本当に二人ともそろいもそろって石頭なのは，よく知っているでしょう。頑固一徹があいつらの欠点で，よりにもよってあの時，その悪い面が出てしまった。二人は，馬鹿にしたような笑いを浮かべて，わたしを「この小心者め」とからかって，水の中へ入っていった。あっ，その前に，二人は足袋を脱ぎ捨て，このようにぱっと素早く衣の裾をたくし上げ，さっと水に入る体勢をとって，それから二人は，手に手を取り，川の中へ入っていった。わたしはその様子を目で追いながら,「はたしてどうやって二人は向こう岸に行きつくのか，すぐにあきらめ，わたしの言う通り，きっと渡し船を探すはめになるんじゃないか，小心者なんて言わなきゃよかったってすぐに後悔するはずだ，利口者は一体どっちなんだい，おれの方じゃないか」と思った。そうして，二人の後を目で追っていると，思わずはっと息をのんだ。結局二人は，手に手を取って川の中を突き進み，真ん

中近くまで行ったところで—ああ，わたしは，自分の眼を信じることができなかった。あまりにも恐ろしすぎて。あの時，わたしの忠告に従ってくれさえすれば，あんなことには，でもまさか，本当にあんなことにはなってしまうとは。あの二人が川の真ん中あたりに行ったと思ったら，「ざぶん」と音がして，急に姿が消えてしまった。それでもいつまでもいつまでもそこを見つめ，きっとまた浮かび上がってくるに違いないって，ずっと信じていたんだけど。—あいつらは足を取られて深みに流されたんだ。渡し守が後になって，まさにあそこに危険なくぼみがあるって言っていた。それでそこにそのうち警告のために竿を一本立てようと思っていたところだったんだと。そこで水の事故がしばしば起こるということでね。いつまでもいつまでも見つめていると，何と—かなり川下へ流されて，あの二人は浮かび上ってきて，—まるでいかだのように—漂い，そして，その時にはすでに息絶えていたんです。もう勘弁しておくれ。悲しみで喉が締め付けられ，これ以上言葉が出てこない。

上述の通り，英訳は『狂言記』に忠実であるように思えるが，独訳を読むと，『狂言記』や英訳と比べてみれば，シテのAは，溺死に至る一部始終（もちろんシテの作り話）を実に事細かに述べている。ここまで言われれば，妻たちは夫の死を疑うことなく，信じずにいられないであろう。いかにもこの独訳のAによる語りは，ドイツ語で言うところのerzählenと言うにふさわしい台詞になっている。『大ドゥーデン辞典』でerzählenは「文字によってもしくは口頭によって目の前に見るように生き生きと描写する」[26]と定義されているが，ここの語りは，実際に聞き手の眼前に情景が浮かんでくるような劇効果を生み出していると言えるであろう。英訳の読者はこのAによる「作り話」を，立ち止まらずに，軽く読み飛ばしてしまうかもしれない。

ところで，その「語り」の語義に関してであるが，日本語の「語り」はどうなのか。『日本語百科大事典』では「「かたる」は「騙（かた）る」「語らふ」と共通するから，相手の心を自分の思い通りに従わせようとする意を持つ」[27]と説明されている。つまり，この語は同音の「騙り」に通じるのではないか。

そこで，狂言においてすぐ思い浮かぶのは，大曲『釣狐』の前段に置かれた「語り」である。老狐が猟師に狐釣りをやめさせるために，猟師の叔父，白蔵主という高僧に化け，妖狐玉藻前（たまものまえ）の故事を引き，「狐は神の化身であり，狐を殺せば，その執念によって人に害をなす」と「語り」[28]，猟師に「これからはもう狐をとらない，罠を捨てましょう」と約束させる。老狐は思い通りに，まんまと猟師を「騙す」ことに成功し，喜び，ほっと安堵する。しかし，その束の間，帰り道に，捨てられていた鼠の油揚げの罠に遭遇し，老狐はその罠の誘惑にずるずると引きずられていってしまう。この「語り」が『釣狐』の前場における見どころになっている。

この独訳の『六人僧』のくだりは，シテ A による巧みな「語り」によって，妻たちがすっかり「騙され」て，生きる希望をなくし，泣き崩れ，絶望の底に突き落とされてしまう場面であるが，その悲しむ様子が唐突な感じを与えず，内側から，自然に描かれているように読める。そう考えると，ここでも「語り」は「騙り」の意を含んでいて，筋が上昇していく転換点の役割を果たしていると見られる。

この場面は独訳では，英訳からかなり離れた自由訳になっており，さらにそれによって狂言台本の構成要素の一つである「語り」の小段を作り出しているように思える。

無論，事情を知っている読者からすれば，出家姿の男がこの話を深刻に語れば語るほど，むしろ滑稽ささえ感じ，その点では狂言らしいとも言える。しかし，その一方で，台詞があまりにも説明的過ぎて，簡潔さを欠いていると言わざるを得ない。それ故，狂言の翻訳としては適切とは言えないであろう。

自分だけ生き残った申し訳なさに出家し，知らせに戻ってきたというシテの状況を妻たちはここでようやく理解し，そして，亭主に先立たれ，もう生きる望みなどなくなった，溺死した夫たちの後を追い，自分たちも死ぬ，と嘆く。そこでシテは，そこまで思っているならば，あなたたちも出家して菩提を弔ったらどうかと勧める。すると，

【狂言記】

女：誰頼まふ人もない程に，こなた剃つてくだされ

シテ：真実左様に思やるか，それならば，剃つておませふ　二人して，

われ先と剃らする，剃りてから，綿帽子かぶせ，

（中略）

シテ：二人ながら，比丘尼なりがよい，さらばさらば

【英訳】

妻：ほかに頼む人がおりませんので，どうかわたしたちの頭を剃っていただけませんか。

A：そのようにお望みならば，わたしがお二人の頭を剃りましょう。

（二人の妻，声をそろえて）わたしから先にお願いします，いや，わたしを先に。

（A，剃り終えると，木綿の頭巾を彼女たちに被せる）

（中略）

A：二人とも尼僧姿の恰好がいいですね。さらば，さらば。

【独訳】

B の妻：でも，わたしたちには頼る人などおりません。お願いがあります，どうか，わたしたちの頭を剃ってくださらぬか。

A：その決意が固く，揺るがないのであれば，喜んでお二人のために一肌脱ぎましょう。

B，C の妻（一緒に）**：**では，わたしから剃ってくださいませ，いや，どうかわたしを先に。

（A，二人の頭を剃り，頭巾を彼女たちに被せる）

（中略）

A：二人とも尼僧姿が似合っていますね。では，お達者で，さらば，さらば。

というふうに，シテの勧めに彼女たちは，何の疑いもなく同意してしまう。しかも，英訳では，『狂言記』よりも妻たちが競い合って，自ら率先して頭を剃ってもらうところがうまく出ているし，独訳でも英訳を踏襲しながら，シテ A の復讐がまんまと図に当たる様子がよく描かれている。無論，実演で舞台上の人物たちが頭を丸めるわけではないが，台詞のやり取りからでも十分に視覚的な面白さが伝わってくる場面である。

しかし，彼は仲間の妻たちを比丘尼姿にしてもなお腹の虫が収まらない。その剃り下ろした髪を高野へ納めましょう，と彼は言って，彼女たちの髪

を携え，さらなる復讐を試みる。

【狂言記】
シテ：一段のことを仕た，まだ是では腹がいぬ，かの者共が遠いへは行まい，追ついて致しよやうがござる，と言ふて行く，
【英訳】
（女たち，退場。男，再び来た道を引き返す）
A：うまくいったぞ。だが，これだけでは気が収まらぬ。あいつらはまだそれほど遠くへは行っていないはず。追いつけるかもしれん。
【独訳】
（女たち，奥へ引き下がる。A，舞台上を横切って移動し，再び大坂へ向うものと想定されたし）
A：うまくいったぞ，はっはっはっ。だが，復讐は道半ばだ。わが友はまだそう遠くへは行ってはいまい。さあ，追いつくぞ。

『狂言記』にはシテがただ一言，「と言ふて行く」と書かれているにすぎないが，英訳では，下線部のようにト書きが入っている。独訳の方では，さらにその英訳の「男，再び来た道を引き返す」というト書きに，「A，舞台上を横切って移動し，再び大坂へ向うものと想定されたし」という人物の舞台上の動きも添えられ，「道行」であることが明示されて，読者にここが場面転換の場になっていることを知らせ，狂言台本によく見られる筋の飛躍を埋めている。

特に，「はっはっはっ」を挿入することで，尼僧姿で涙を浮かべながらAを見送る妻たち，そして，高笑いをしながら高野へ向かうA，この両者の心の明暗を巧みに描き分けている。これはランゲッグが台詞の行間が読めているなと感じさせる箇所である。また，独訳の台詞からアドB,Cに対する，Aの復讐への執念も『狂言記』や英訳以上に見て取れる。

さて，この後の話の展開であるが，『能・狂言事典』の『六人僧』の梗概によれば，「男は再び旅立ち，ふたりに再会，ふたりの妻は夫たちが愛人をつくったと誤解して自害したと告げ，証拠に剃った髪の毛を見せる」[29]，『能楽事典』でも男は，「国もとへ帰ってみると，三人が仏詣に出たと言ったのは嘘でなじみの女を連れて上方へ遊山に行ったのだと讒言する者があ

り，自分の妻は上方へ尋ねに上がったが，二人の妻は夫を恨んで刺し違えて死んだと言い，その証拠だと妻たちの髪を見せる」[30] と紹介されている。しかし，『狂言記』の筋はそれとはまったく異なる。

【狂言記】
シテ：其ことじや，某義在所へ戻つたれば，誰が言ふたやら，「二人ながら川にはまつて死んだ」と言ふて，在所では泣き嘆く（中略）
シテ：いや，そふ言はば言え，女房衆が，「生きても死んでも」と言ふて，自害して死だ
【英訳】
A：いや，実はな，家に帰ると，その噂話がどう広まったのかはともかく，「そなたたちが川に落ちて死んだ」という知らせを家の人たちが聞き，嘆き悲しんでいたんだ。（中略）
A：作り話なものか。そなたたちの女房は，「この世であろうと，あの世であろうと，亭主のそばに参ります」と言って，自害して死んだんだ。
【独訳】
A：誰が言って，噂がどう広まっていったかは，分からぬが，昔から「不幸な知らせは翼をもつ」という言い伝えがあるだろう。長屋に戻ってみると，そなたたちの女房が「そなたたち二人が川に落ちて死んだ」と言って，悲しみに声上げ，泣いていたんだ。（中略）
A：いや，笑いごとではない，とても悲しむべきことがあるのだ。家に戻れば，いずれ分かることだが，そなたたちの女房は「この世でも，あの世でも亭主とどうしても別れたくない」とはっきり言って，自害して死んだんだ。

英訳を見ると，上記の二つの狂言事典で紹介された筋立てにはなっておらず，『狂言記』の筋に基づいているのが分かる。

英訳の考察については，本論の目的ではないので，確認だけにとどめるが，ここまで見てくると，市河氏の見解の通り，英訳者は恐らく『狂言記』に依拠して『六人僧』（ROKUNINSO）を翻訳しているのではないかと推測できる。ただし『墨塗』訳に関して言えば，英訳者は『狂言記』に拠っ

ていないのではないかということは前で述べた。

独訳の台詞は，英訳に少し言葉をつけ足している程度で，ほぼ英訳に従っている。ここまで見れば，独訳は英訳を原本にしていると言えよう。

アドと後アドのBとCは，妻たちが死んだというシテのAの話をまったく信じようとしない。それで，シテのAは，遺髪と称して，彼らの妻の頭を剃った毛を目の前に見せつけ，手渡す。すると，それをアドの二人は恐る恐る手に取り，じっと見る。

【狂言記】

アド：やれ，だまされはせまいぞ

シテ：夫れなればぜひもない，去ながら証拠が有

アド：夫は何事ぞ

シテ：是々，此髪をみさしませ，これはそなたの女房衆の，また是はわごりよのお内儀のじや，憶へはないか

二人ながら，手に取見て，

アド：これはいかなこと，髪が短ふて赤い

又一人は：鬢が縮うで有，さてはまことか

【英訳】

B：何だって，そんな話には騙されないぞ。

A：いいだろう，そう思うのも勝手だが，こっちには動かぬ証拠がある。

B：証拠だと。それならどんなものか見せてくれ。

A：さあ，B，これはそなたの奥さんの髪。ほら，C，こっちはそなたの奥さんのだ。見覚えはないか。

（二人，それらの髪を手に取り，確かめる）

B：え，どうして。短くて，茶髪だ，これはまさに―

C：この髪は片側が縮れている，何ということ。本当の話だったとは。

【独訳】

B：そなたの冗談は許されるものではないぞ。そのような趣味の悪い冗談で人を騙せるとでも思っているのか。

A：いや，それが作り話であってほしい。でも，残念だが，全部本当の話だ。こっちにはそなたたちを納得させる証拠がある。

B：何，そんなものがあるのか。なら早く見せてくれ。

A：ほら，これだ。これはそなたの奥さんの髪，こっちはお前さんの奥さんのだ。見覚えはないか。

（それらの髪をCに手渡し，驚いてそれを見つめるC）

B：こりゃ，驚いた，本当に妻の髪だ。―短くて，赤毛だ。間違いない。

C：あいつの髪の毛だ。黒くて，縮れている。どう見ても本物だ。

『狂言記』におけるシテの台詞「髪が短ふて赤い」は，英訳の原文では short and brown! となっていて，その brown に「原文では *Akai*，つまり，red」との註があり，この後の with one side curly ！にも「原文では *Chijirete*，つまり，黒人のように縮れた髪。日本には，赤色や茶色の毛，巻き毛の女性はほとんど見られない」[31] という説明がついている。

では，独訳ではどうか。独訳の原文では rot und kurz! となっていて，この後に schwarz und kraus. というふうに，『狂言記』，英訳にはないが，日本人の髪色である schwarz が添えられている。独訳の註では「赤い毛について言うと，赤色であれ，金髪や茶髪であれ，真っ黒でない髪のことを日本人は，すべて赤毛と言う。それ故，彼らは西欧人のことを『紅毛人』と呼ぶ。ここでこの妻たちの髪を赤毛，縮れ毛と言い表しているのは注目に値する。. . . 私が思い出してみても，上で言ったような赤い髪の毛の存在を読んだことはないし，聞いたこともない。実際，私自身一度もそのような赤毛や縮れ毛を見たことはなかった」[32] とランゲッグは，日本の滞在中に見聞した実体験から独自の寸評を加えている。

日本人の髪の色に関して，英訳では『狂言記』の「赤い」を brown（「茶髪」）に変え，独訳では schwarz（「黒髪」）を挿入している。英独それぞれの翻訳者の解釈が入っていて，面白い。

そのあと，妻の髪の毛を見せられたBとCの二人は泣き崩れ，出家して妻の跡を弔いたいので，頭を剃ってくれないかと自ら進んで言い出す。シテのAはその頼みに応じ，喜びを胸に秘め，参詣仲間の二人の頭を剃り上げ，こうして仕返しに成功するのである。これで，シテA，アドBの妻，後アドCの妻，アドB，後アドCの計五人の僧ができたことになる。

シテのAは，一旦郷里に戻ってから高野へ参ろう，と二人のアドBCを引き連れて在所に戻る。そこで，アドの夫婦二組は，互いに生きていたことが分かって喜ぶものの，ほどなくこの四人は騙されたことに気づき，怒

り心頭に発して皆でシテのAの妻のところへ押し掛けていき，その頭を丸めてしまう。これで三組の夫婦，つまり，六人全員が僧の姿になって舞台に勢ぞろいし，シテはこう言う。

【狂言記】
シテ：昔からも，こはざれはせぬことじやと云が，此ことじや，去ながら，是はただごとでは有まい，後世を願へと有お告で有ふぞ
アド：誠に短ひ命を持て，徒に暮らさふことでない程に，是を菩提の種として，後世を願はふ
シテ：夫ならば，某音頭を取て申さふ，なまふだ
三人：なまふだ
比丘：なまふだ
皆皆：なまふだ，なまふだ，なまふだ，なまふだ，とつぱい，ひやろ，ひ
【英訳】
A：昔から「度を越したいたずらは，するべからず」という言い伝えがあるが，今回それが身に染みたよ。だけど，このことはただの出来事とは思えぬ。未来のことにしっかり目を向けよとのお告げかも知れんな。
B：その通りだ。この短い人生を無駄に過ごしてはいけない。今回のことを救いへの第一歩としようではないか。そして，皆で極楽浄土を目指そう。
A：それでは，わたしがそなたたちを祈りへと導きましょう。（なもーだ）
（三人の男たち，なもーだ）
全員：んなああむむおーおーだああ。（退場）
【独訳】
A：昔から「呪いは，呪う人の頭上に返る」という言い伝えがあるが，まさにこのことだとわかったよ。だけど，今度の思いがけない出来事は，めったに起こることではあるまい。それゆえ，われらの一念をこの世から来世に向けよとの仏の導きではなかろうか。
B：その通りだ。この限りある，短い人生を無駄に過ごすべきではな

かろう。それゆえ，この出来事が，救いへの，極楽への巡礼の旅の第一歩となるように，願おうではないか。

A：それなら，このわたしに導師役を務めさせてくれぬか，そして，そなたたちの祈りを導かせてくださらぬか。（唱え始める）なみーだぶつ！

三人の夫たち：なあーあーあーみいーいーいーだー！

全員：なあーあーあーあーあーあーみいーいーいーいーいーいーだあーあーあー・・・・・

（念仏を唱えながら，一列縦隊で何度も舞台上を回り，そして橋掛かりを通って退場）

『狂言記』の「こはざれはせぬことじや」における「こはざれ」とは『狂言事典 語彙編』では，「［強戯れ］ひどいたわむれ。わるじゃれ。」[33] と説明されている。英訳では Don't play tricks on too large a scale となっているので，原文を直訳的に英語に移している。しかし，このような英語の諺は，調べた範囲では見当たらない。

それに対して，独訳では Wer andern eine Grube gräbt, fällt selbst hinein. という文になっており，英訳からの自由訳になっている。拙訳では「呪いは，呪う人の頭上に返る」としておいたが，この台詞は，独和辞典ではたいてい「人を呪わば穴二つ」と訳されている聖書由来の諺である。確かにこれは『狂言記』の台詞や英訳から意味がずれているけれども，原典の全体の構成は崩れてはいないと思われる。ここで一般的にドイツ人に知られている諺を使い，ドイツ人に分かりやすく結末を提示しようとする，訳者のランゲッグの工夫が見られる。

ところで，終曲の箇所であるが，『狂言記』では，全員が念仏「なまふだ」を四回ほど繰り返し唱え，「とつぱい，ひやろ，ひ」というふうにシャギリ留となって，人物が笛の譜を口で真似て，曲の結末を告げている。英訳では終曲をただ「ん，なーむもーだー（退場）」と一言の念仏と簡単に「退場」の指示だけで処理しているが，それに対し独訳では「なあーあーあーあーあーあーみいーいーいーいーいーいーだあーあーあー・・・・・」の台詞の後，全員が「念仏を唱えながら，一列縦隊で何度も舞台上を回り，そして橋掛かりを通って退場」とやや詳しいト書きが付け加えられ，念仏

を口にしながら橋掛かりを通っていく，という終わり方にしている。英独を比較してみると，独訳の方が，舞台上の登場人物が皆，声と足並みを揃え，橋掛かりを経て，揚幕の中へ入って行くことによって，最後に六人全員が和解して終曲を迎えるといった劇的な効果を醸し出しているように思える。まさに独訳の幕切れは，『狂言記』以上に狂言らしい。

ランゲッグが３年半に及ぶ京都での滞在中に，実際，能舞台での観劇を体験したことがあるかどうかを今のところ確認できていないけれども，明らかに能舞台での狂言の上演形式にある程度精通していたのではないかということがこの結末の訳においても推測できよう。

この念仏（『狂言記』では「なまふだ」）は，外国人には理解しにくい言葉だと思うが, 註においてどう説明されているだろうか。英訳の註では「宗派によって異なるが，仏教の念仏はこのような言葉を延々と繰り返す。なぜなら，『祈るとときには，言葉数が多ければ，聞き入れられるもの』だからである。」[34] とマタイによる福音書の節を切り取って説明している。英語話者にわかりやすくという考えから付けられた註だと思うが，これは的外れな解説ではないだろうか。念仏の説明になっていない。

独訳の註では，英訳の解説の見解とは異なり，「Namīda Butsu は『救ってください，永遠なる仏様！』のことで，特別な祈祷の文句のある日蓮宗を除き，あらゆる宗派の仏経の冒頭の言葉，死に対する祈りでもある。その言葉を絶えず，繰り返し口にすることで，来世における魂の救いが確実なものとなる」，さらに「Namīda は，Namu と Amīda の縮合形であって，Namu は，仏陀（仏）の前に置かれた，パーリ語であり，Amīda は仏陀の別名である。この Namīda Butsu はまた，『無限の光明の中で健やかでありますように，仏様！』という言葉にも解釈される」[35] とランゲッグは念仏の語源までさかのぼってその語義について解説している。英訳と比べると，ランゲッグの説明の方が学問的で説得力があると言える。

『扶桑茶話』の翻訳者の奥沢氏は，「ヨンケルの生涯と業績に立ち入るにつれ，彼は優れた臨床医で画期的な医療器具の発明家であり，科学者としてだけではなく日本の歴史や文化に対して大きな探求心を持ち，明治初期の日本，特に京都，京都の風土と文化をこよなく愛した，語学力と文才に長けた民俗学者であることを再確認させるに至った」[36] と前書きに書き記している。この狂言の翻訳からもその片鱗は見られる。

5

以上，独訳の『六人僧』を，『狂言記』を参照しがら，英訳と突き合わせて比較してきたが　最後にこの翻訳の特徴について述べたいと思う。そのためにまず，サルス氏が過去 150 年に及ぶ能・狂言の古典作品の翻訳を四種類に分類しており, 非常に簡潔かつ明快に整理されていると思うので, それを引用しておきたい[37)]。

（一）文学としての作品の翻訳
　歴史的，文学的な事項に言及した説明的な脚注のある完訳
（二）上演されるものとしての作品の翻訳
梗概および，面と装束・演出・挿図についての入門的な説明
（三）上演を理解するための作品翻訳
上演中に読まれる，注釈つきの二か国語の台本
（四）外国語上演のための作品翻訳
非日本人が外国語による上演のために作成した脚本

では，1894 年にドイツの『内外文学雑誌』に掲載された初の独訳狂言と思われる『六人僧』は，上の四つのうちの一体いずれに属するのだろうか。それについて述べて，本論の結論としたいと思う。

この翻訳は，やや詳しい舞台指示があるとはいえ，狂言の歴史，能との関係やハンス･ザックスの文学に比せられるもので，滑稽味を主眼とする，日本の中世の演劇である，といった解説を前書きに置いていることから，これはドイツの文学者，文学愛好家，詩人を対象にした，読むための戯曲の翻訳であって, 上演を目的として独訳された台本ではないように思える。それ故, サルス氏による分類の（二）（三）（四）には当てはまらないと言っていいであろう。

そして，上で見てきたように，ランゲッグが『ザ・クリザンテムム』誌上に掲載された『六人僧』の英訳に拠りながら，理解しにくいと思われる箇所を分かりやすくするために，英訳に卜書きや言葉を添え肉付けをし，若干変更を加え，時には大幅に加筆を施して翻訳し，そして解説的な注を付けて, ドイツ語圏の人に日本の古典喜劇の存在を紹介しようとしたのが, この狂言の独訳ではないかと考えられる。

従って，『六人僧』の独訳は，サルス氏の分類に従えば，「歴史的，文学的な事項に言及した説明的な脚注のある完訳」と見なされるので，（一）の「文学としての作品の翻訳」に該当すると思われる。

テキスト

1）F.A.Junker v. Langegg:Alte japanische Dramen.in:Das Magazin für die Literatur des In- und Auslandes,53 Jahrganges Nr.15.S.230-232. および Nr.16.Leipzig 1884. S.250-251.
Alte japanische Dramen. Ⅱ. In:Das Magazin für die Literatur des In- und Auslandes, 53 Jahrganges Nr.24.Leipzig 1984. S.378-380. および，Das Magazin für die Literatur des In- und Auslandes, 53 Jahrganges Nr.25.Leipzig 1984. S.397-399.
URL:https://books.google.co.jp/books?id=lHwDAAAAYAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false（参照日：2022 年 11 月 20 日）
なお，ランゲッグは『六人僧』を Drei Tonsuren（Roku-nin-sō）と訳し，タイトルにしているが，前書きでは，Sechs Tonsuren と書いている。Vgl.S.229.

2）ROKUNINSO, In:The Chrysanthemum, vol.2, no.5. Yokohama 1882. 5.P.201-207.
INK‐STAINED, In:The Chrysanthemum, vol.2, no.7. Yokohama 1882. 7. P.297-304.

3）橋本朝生，土井洋一校註：狂言記 新日本古典文学大系 58 岩波書店 1996.
『狂言記』は縦書きであるが，そこからの引用を本論では『リュンコイス』の執筆要領に従い横書きにしている。なお，引用文中の下線は筆者による。

註

1）市河三喜：狂言の翻譯　野上豐一郎編集 綜合新訂版 能樂全書 第五巻 所収。東京創元社 1990 年（初版 1970 年）．211 頁

2）前掲書。211 頁

3）古川久，小林責：狂言辞典（資料編）東京堂出版 1985. 71f.

4）例えば，市河三喜がカール・フローレンツによって 1901 年にドイツ語に翻訳された狂言『萩大名』の前段のみを解説しているものがある。前掲書。229-230 頁

5）新潮社辞典編集部：新潮日本人名辞典 新潮社 1991. 1816 頁

6）Rogan Schmidt-Rimpler：Die Entwicklung der Dräger Anästhesietechnik（1902–1918）im internationalen Vergleich, Lübeck 2008. S.7. なお，ウィキペディアで「フェルディナント・アダルベルト・ユンケル」の項目のドイツ語版を見ると，死亡年月日の記述があり，新聞 Neue Freie Presse の死亡記事のデータを確認することができる。https://anno.onb.ac.at/cgicontent/anno?apm=0&aid=nfp&datum=19011122&seite=16&zoom=2（参照日；2022 年 11 月 20 日）。また，Wien Museum/Magazin の記事 Der Wiener Arzt Ferdinand Adalbert Junker von Langegg URL: /der-wiener-arzt-ferdinand-adalbert-junker-von-langegg を検索すると，上記の死亡記事が掲載されている（参照日；同年 12 月 3 日）。そこには「長い療養の末，プルカースドルフのサナトリウムにて 1901 年 11 月 20 日の水曜日午後 1 時に永眠いたしました」と記されている。

7）野上記念法政大学能楽研究所編集：『外国人の能楽研究』21 世紀 COE 国際日本学研究叢書Ⅰ 法政大学国際日本学研究センター 2005. 190-195 頁

8）西野春雄・羽田昶 編集：能・狂言事典 平凡社 初版 1999.

9）奥沢康正訳：外国人のみたお伽ばなし - 京のお雇い医師ヨンケルの『扶桑茶話』 思文閣出版 1993. 269-270 頁（原著名：Ferd. Adalb. Junker von Langegg：Japanische Thee-geschichten: Fu-sô châ-wa. Volks- und geschichtliche Sagen,Legenden und Märchen der Japanen,Wien: C. Gerolds Sohn, 1884.）インターネットで原文を見ることができる。https://books.google.co.jp/books?id=SbFEAQAAMAAJ&pg=PA127&hl=ja&source=gbs_toc_r&cad=4#v=onepage&q&f=false（参照日；2022 年 11 月 20 日）。

10）前掲書。付録 24 頁参照。奥沢氏は，ここで「Alte japanische Dramen. /Das Magazin für die Literatur des In- und Auslandes,1983, Leipzig」と記載している。1883 と書いてあるので, これは謡曲の『高砂』の翻訳のことを示している（註 23 参照）。『六人僧』『墨塗』が同誌上に掲載されたのは，翌 1984 年 5 月と 7 月である。つまり，このジャパノロジーの業績表では，これらの狂言の翻訳は度外視されているということになる。

11）F.A.Junker v. Langegg: ibid, S.251, S.380.

12）市河三喜：狂言の翻譯 前掲書。214 頁

13）小林責，西哲生，羽田昶：能楽大事典 筑摩書房 2012. 260 頁

14）橋本朝生，土井洋一校註：狂言記 新日本古典文学大系 58. 岩波書店 . 1996.

凡例 v 参照。

15）奥沢康正訳：前掲書。279 頁。

16）西野春雄，羽田昶 編集：新版 能・狂言事典 平凡社 2011. 250 頁

17）古川 久，小林責：狂言辞典 資料編 東京堂出版 1986. 70 頁

18）Petko Slavov：外国人の目に映った能楽の明治維新：海外に伝えられた能狂言のイメージ 大阪大学。博士論文。2014. 44-45 頁

19）無 著 名：ROKUNINSO, A Japanese Play, Translated from the “Kiogen”, in:The Chrysanthemum, vol.2, no.5,Yokohama: Kelly.1882. P.201.

20）前掲書。P.206-207.

21）前掲書。P.207.

22）F.A.Junker v. Langegg:Alte japanische Dramen.In:Das Magazin für die Literatur des In- und Auslandes, 53 Jahrganges Nr.15.1884.S.229.

23）F.A.Junker v. Langegg:ibid, S.229.
F.A.Junker v. Langegg: Das Takasogo-no Utai.（Die Gattenföhre von Takasago）Ein japanesisches Festspiel. Das Magazin für die Literatur des In- und Auslandes, 52. Jahrgang.1883. Nr.22.S.316-319. に能と『高砂』の概要，そして 1983 年 Nr.23.S.329-333. に謡曲『高砂』の独訳を出している。それらは 1983 年の 6 月 2 日と 9 日の発表であるから，狂言『六人僧』の独訳の約 1 年前である。In: Eduard Engel : Das Magazin für die Literatur des In- und Auslandes, 52. Jahrgang, 103. Band（Januar bis Juni 1883）Paperback, Norderstedt 2017. なお，ランゲッグの『扶桑茶話』（1984 年）には 31 のおとぎ話が収められており, その中に「高砂の夫婦松」がある。奥沢康正訳：前掲書。201-203 参照。

24）F.A.Junker v. Langegg:ibid, S.229.

25）F.A.Junker v. Langegg:Alte japanische Dramen.in:Das Magazin für die Literatur des In- und Auslandes, 53 Jahrganges Nr.16.S.250.

26）Duden:Das große Wörterbuch der deutschen Sprache.（6Bände）Bd2, Mannheim 1976.S.752. なお，『独和言林』での erzählen の原意は，「〈数えあげる〉」と説明されていて，原意を照応させて「‘ 逐一 ’ 話す」という訳語を最初に置いている。佐藤通次：独和言林　白水社　1975. 414 頁

27）金田一春彦，林大，柴田武 編集代表：日本語百科大事典 大修館書店 1988. 867 頁

28）和泉保之氏が 1957 年 5 月 25 日に大曲観世能楽堂にて『釣狐』を披いた際の，権藤芳一氏による劇評にこうある。「一般には好評のようであるが，ぼくは感心しなかった。セリフに感情がなかった。（中略）語りは不明瞭だ。ここの語りは折口信夫説にあるごとく，文字通り相手の魂をカタリとる（だまし→納得させ→同意させる）のでなければならない。」権藤芳一：『釣狐』と『井礑』（狂言）『間』第 9 号 名古屋歌舞伎研究会 1957. 51 頁。 つまり，『六人僧』ではシテの男は復讐心から，まず，髪を剃って尼にすることを妻たちに納得させ，そして，同意させようと目論むわけだが，独訳では，シテの A による詳細な「語り」の効果によって，妻たちを「だまし→納得させ→同意させる」という経緯が外的でなく，ごく自然な印象を与えている。

29）西野春雄，羽田昶 編集：前掲書。251 頁

30）小林責，西哲生，羽田昶：前掲書。956-957 頁

31）無著名：ROKUNINSO, P.207.

32）F.A.Junker v. Langegg: ibid.S.251.

33）古川久編：狂言事典 語彙編 東京堂出版 1989（初版 1963）．174 頁

34）無著名：ROKUNINSO, P.207.『マタイの福音書』6 章 7 節参照。ルター訳を引用してみると，Und wenn ihr betet, sollt ihr nicht viel plappern wie die Heiden:denn sie meinen, sie werden erhört, wenn sie viele Worte machen.「また，祈る場合には，異邦人のようにくどくど多く祈るな。彼らは言葉数が多ければ，聞き入れられると思っているからである。」Martin Luther : Die Bibel nach der Übersetzung Martin Luthers. Deutsche Bibelgesellschaft. 1984.S.8.

35）F.A.Junker v. Langegg: Nr.16.S.251.

36）奥沢康正訳：前掲書。「まえがき」の i 頁参照。

37）ジョナ･サルズ, ジョン･オグルヴィー, ガート･T･ウエスタハウト, ジュリー･A・イエッツィー：シンポジウムⅠ 能狂言の外国方言 - 古典芸能の英語版とミュージカルへのチャレンジ -『演劇学論集』紀要 60 号 2015. 72 頁